

文化審議会第15期文化政策部会
基本計画ワーキング・グループ（第2回）

平成29年8月8日

【熊倉座長】 時間になりましたので、文化審議会第15期政策部会基本計画ワーキング・グループ第2回を開催したいと思います。

本日もお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。大和委員、吉本委員は本日御欠席とのことでした。

早速ですが、議事に入りたいと思います。

議題1、文化芸術推進基本計画の策定に向けた検討についてですが、事務局より説明をお願いいたします。

【井上文部科学戦略官】 資料1-1と1-2が前回の資料でございます。少し前回の資料を振り返っていただければと思います。

資料1-1の2ページをお開きいただき、「文化芸術推進基本計画」の策定に向けた検討ということで大臣の諮問を受けまして、4点について御審議いただくことになっています。

右側の今後の文化芸術政策の目指すべき姿と、今後5年間の文化芸術政策の基本的な方向性について、今後5年間に取り組むべき文化芸術に関する基本的な施策について、4番目として、それら効果的な政策の立案、実施、評価・検証、新たな政策への反映というサイクルを確立するための評価・検証改善の方策についてでございます。

検討のスケジュールについては、現在、日程を調整させていただいておりますが、新たに、前回の熊倉座長からの御提案もございまして、10月5日に基本計画ワーキング・グループの第4回を開催したいと思っております。分野別の分科会又はワーキング・グループでの検討事項(3)を中心にした審議も踏まえまして、(3)や指標の検討についても改めてしていただいた後に、文化政策部会の第4回につなげていきたいと思っております。

審議経過報告につきましては、10月から11月にかけて実施をいたします文化政策部会の第5回で、ある程度の基本的な考え方をまとめまして、総会につなげていきたい。その間に、文化芸術推進会議という関係省庁会議も開催を予定していきたいと思っております。また、その後、ヒアリングをいたしまして、中間報告、答申として、来年春には閣議決定をしていきたい、年度内を目途に答申、というのが大臣からの諮問でございました。

次に、5ページをお開きください。前回の御議論で、大体構造については、重点目標を作るかについて今後の残された課題でございますが、基本計画の年限といたしましては、2018年から2022年の5年間の文化芸術政策の基本的な方向性を作っていく、また、今後の文化芸術政策の目指すべき姿と基本的な施策群を作っていくことで大体御了承を頂きましたので、本日は、前回の御議論の中で、より詳しいたたき台の素案を事務局の方で作成して、

それを基に御議論を展開したいと御指示を受けましたので、資料 2-1 と 2-2 の方でたたき台の素案という形で、今後の文化芸術政策の目指すべき姿と今後 5 年間の基本的な方向性につきまして、事務局の方でたたき台素案を作成いたしましたので、それを御参照いただいで御議論を頂ければと思っております。

なお、机の上に机上配布資料 1 と机上配布資料 2 といたしまして、湯浅委員の方から、アーツカウンシルイングランドの「Great art and culture for everyone」、2010 年から 2020 年の 10 年の戦略的枠組みの第 2 改訂版、2013 年に改訂された改訂版、松田委員から、オーストラリアの文化の役所の国家文化政策、こちらは 2011 年のオーストラリアの未来に対するビジョンの策定ということで資料を提供いただきましたので、事務局の方で参考になる部分につきまして暫定の訳をしております。訳として適切かどうかという部分もあるかと思いますが、御参照いただければと思っております。

なお、松田委員からのお話では、このオーストラリアの方の 2011 年の策定を受けて、これも参考にし、アーツカウンシルイングランドの方の 2013 年改訂が行われたと聞いておりますので、その辺の詳しい話もお聞かせいただければと思っております。

それでは、2-1 と 2-2 の方を御説明させていただきたいと思えます。資料としては 2-1 がより分割された資料でございまして、それを全体的に参照するものとして 2-2 が一覧表になっておりますので、適宜 2-2 を参照いただきながら、2-1 の方を説明させていただきたいと思えます。

資料 2-1 を 1 枚お開きいただき、裏側に、今後の文化芸術政策の目指すべき姿と今後 5 年間の基本的な方向性の関係性について、たたき台素案ということで御提示をさせていただいております。これは、先ほど資料 1-1 で御説明させていただいた 5 ページの、基本計画の検討土台のうち一番上にございます中長期的視点が、この左側でございます。

目指すべき姿、4 つございまして、文化芸術の創造と発展、次世代への継承、英語で言いますと **Creation, Deepening and Succession** ということで、これは文化芸術そのものの振興に近いのかなと思っております。次代へのエクセレンスみたいなのも入ってくるのかと思っております。

あと、文化芸術によりイノベーションを生む、活力ある社会の形成、**Cultural Innovation** というのが 2 番目でございます。経済的価値、社会的価値を文化の中から生み出して、それをまた文化に還元するというのも入ってくるかと思えます。

そして、3 目といたしましては、**Diversity and Well-being** で、文化芸術をアイデンティティとし、多様な価値観を受け入れる、心豊かな社会の形成をしていく、インクルーシブ的なものもここにも入ってくるかと思っております。

そして最後に、**Cultural Community** で、文化芸術を通じた地域コミュニティの形成。

中長期的視点を、今までの第 4 次基本方針とか、緊急提言、さらには基本法で書かれてございます前文とか総則の基本理念を俯瞰（ふかん）して作りますと、この 4 つに大体集約されてくるのかと、今、私どもの事務局の方でたたき台を作っております。

そして、この4つの目指すべき姿を今後5年間でどうやって実現していくのが、基本的な方向性、戦略を6つ掲げてございます。

1つ目の「文化をつくる」、文化芸術の創造・発展・継承は、この目指すべき姿の一番上の文化芸術の創造と発展、次世代への継承に対応するものでございます。

そして、戦略2、「文化で稼ぐ」というのは、目指すべき姿の2番目に相当するもの。

そして、「文化で世界とつながる」、文化芸術による国際性の深化というものが、文化芸術をアイデンティティとし、多様な価値観を受け入れる、心豊かな社会の形成につながるもの。

そして、戦略4として、「文化で地域をつなぐ、社会をつくる」が、文化芸術による多様な価値観の形成で、文化芸術を通じた地域コミュニティの形成につながるもの。これ、いずれにしても、線はいろいろなところにかかっていますが、そういうところで対応しております。

最後に、戦略5と戦略6については、「人をつくる」「ネットワークをつくる」で、文化芸術政策の目指すべき姿全てに関わってくる、これは基盤的なものかと思っております。この辺の関係性についてはいろいろ御意見があるかと思っております、私どもも整理の過程で悩みながら作っておりますので、是非御指摘を頂ければと思っております。

そして、今後の文化芸術政策の目指すべき姿のイメージというのが、その反対側にございますたたき台素案として提示されているものでございます。

文化芸術の創造と発展、次世代への継承というのは、仮に実現いたしますとどういう姿になるのかがこの姿でございまして、人々が文化芸術の価値を重視する社会の実現を目指しており、文化芸術を誇りに感じている、若手の新進芸術家が次々と養成され、芸術祭やコンテスト等で活躍している、文化財に加えて、知識・技能・物品等が次世代に確実に継承されている等々が、成功モデルとして一応掲げているところでございます。

これは、机上配布資料のアーツカウンシルイングランドの資料をちょっと御覧いただければと思うのですが、アーツカウンシルイングランドでは、ゴールとして5つ設定しております、それぞれのゴールについて、例えば3ページ、ゴール1の **Excellence is thriving and celebrated in the arts** では、**What will success look like?** ということ、成功モデルはどのようになるのかということ、アーティスト、文化芸術団体、美術館、博物館及び図書館は、高い野心、才能、能力を持つ文化芸術的な作品や文化的な体験を届けていると、具体的にこういう目標を掲げて、成功したときにどういう姿になるのかを分かりやすく文章化しているところでございまして、今後、基本計画を作る際の参考になるかと思ひまして、同じような試みをした次第でございしますが、内容については、たたき台でございしますので、先生方の御意見を頂ければと思っております。

資料2-1に戻りまして、1枚めくっていただきまして、先ほど御説明させていただいた、今後5年間の文化政策の基本的な方向性、相互の関係性について書いてございます。「文

化をつくる」という戦略 1 が、文化芸術そのものの振興ということで非常に大事ですが、「文化で稼ぐ」「文化で世界とつながる」「文化で地域をつなぐ、社会をつくる」、戦略 2, 3, 4 も、文化そのものの振興から拡大した総合的な文化政策ということで、今後非常に重要になってくるだろう。そして、それらを支える「人をつくる」「ネットワークをつくる」。「人をつくる」の中には、専門人材の確保と学校教育、社会教育による裾野の拡大、両方入ってくるわけですが、そういう基盤作りというのも大変大事になってくるのではないかと考えているところでございます。それを図示したものでございます。

その次、右側でございますのが、戦略と施策との関係性を表したものでございます。当然ながら、戦略の下に基本的な施策群がそれぞれひも付いてくるわけですが、施策の中でも、今回、こういう総合的な文化政策化に伴いまして、関連分野との連携でございますとか、また、2020年のオリンピック・パラリンピックを視野に入れて、2020年のレガシーの創出と関わってくる施策が多数ございますので、それにつきましては、施策 2、横断的施策ということでインデックスを付けてございます。

次のページをお開きいただき、戦略 1 から戦略 6 まで、主な基本的な施策の例ということで列記をしております。基本的な施策については今後、この場でも御議論いただきますし、個別のワーキング・グループ、基本的な分科会でも御議論いただきたいと思いますので、大枠で示してございますが、その中で、例えばメディア芸術の振興ですと、関連分野との連携協働がかなり深くございますので、そこで横断的連携ということで関連分野との連携協働を付けてございます。また、劇場、音楽堂の活性化や、美術館、博物館、図書館等の充実というのは、2020年の文化プログラムを通じてレガシーの創出につながる、レガシーの創出というような横断的施策のインデックスを付けています。

以下、戦略 1 から 6 までそういう形で、特に関わり合いの深いもの、横断的施策全てに関わってくるとは思いますし、レガシーの創出も関わってくるとは思います、特に関わりが深いものに付けています。

また、指標につきましては、戦略 1 から 6 までの下の方に、「（進捗状況を測るための指標候補）」で、現在、既に第 4 次基本方針で成果指標として掲げられているものや、策定を検討しております第 3 次教育振興基本計画での指標候補として挙げられておるものについて掲げています。これについては、これからこの場でも御議論を頂きたいと思えますし、個別の基本分科会、ワーキング・グループでも御議論いただきまして、第 3 回、第 4 回の基本計画ワーキング・グループでも、是非、この指標候補についてどうあるべきか、また、本来あるべきですが、ちょっとデータが足りないので、第 1 期計画期間中はできないけど、第 1 期期間中に指標を開発すべきものはどういうものがあるのかということについても御意見を頂ければと思っております。庁内でも指標については議論を今しようとしているところでございますが、是非、先生方の御意見を頂ければと思っております。

以上でございますが、簡単に机上配布資料 1、その前に資料 3-1、現在の文部科学省の文化関係の政策目標を掲げたものでございます。12-1 が芸術文化の振興、12-2 が文化財

の保存及び活用の充実，12-3 が日本文化の発信及び国際文化交流の推進，12-4 が基盤の充実ということで，現在の基本法，第4次基本方針とも一致しておりません。できれば，基本計画策定後は，この政策目標も基本計画に沿った形で見直しをしたいと思っております。既にスポーツの方は，スポーツ基本計画に沿った形で政策目標が見直されているところでございます。

以上，3-2，3-3 は参考でございます。

あと，机上配布資料の1と2について簡単に御説明をさせていただきますと，机上配布資料の1は，アーツカウンシルイングランドの2010年から10年間の戦略的枠組みの2013年の第2版でございます。1枚送っていただくと，2ページに，その目標が5つ掲げられておまして，エクセレンスというのが1番目で，すぐれた文化芸術が発展するというようなこと，2番目が，誰もが文化芸術を体験したり，インスピレーションを得たりする。3番目が，文化機関というのが弾力性のあるレジリエンスを持っている，あとはサステナビリティを持っているということ。4番目として，人材が多様で高いスキルを有しているということ。そして，全ての子供と若者が豊かさを体験する機会があるということでございます。これも参考にいたしまして先ほどの資料2-1を作成いたしましたところでございます。

それ以降，3ページ以降は，ゴールごとの，先ほど申し上げました成功モデルはどのようになるかというのが，Our goalsは1の3ページ，そして，何をするかというのが，施策が4ページ，そして，6ページには，どのように図るのかということが書いてございます。

ゴールの1とゴールの2だけちょっと訳したので，ゴールの3以降はちょっと間に合わなかったのですが，御参考にいただければと思います。

机上配布資料の2は，国家文化政策，オーストラリアの2011年の10年間の資料でございます。こちらについては，やはり国の文化政策なんですけど，オーストラリアの場合は先住民がいるということで，先住民の言語と文化を保護し，支援することや，クリエイティブ産業について非常に重視をして，促進するというようなことを書いてございますが，こちらにも4つゴールが書いてございまして，4ページを御覧いただければと思いますが，点線で囲ってあるところが戦略的枠組みの目標になってございまして，政府が何を支えているかということで，21世紀のオーストラリアの多様性を反映して先住民の文化保護指針をするということ。2番目として，新しい芸術と創造的な産業の発展を支え，新技術と新しいアイデアの活用を奨励することとか，あと，芸術と文化にアクセスするようなことを可能にする，革新と世界的な試みをサポートし，芸術が国内外でのオーストラリアの，ストーリーを伝える役割を強化するというようなこととかが，社会と経済に貢献する芸術能力を促進強化するというようなことが，オーストラリアの国家文化政策の目標になっているところです。

私からの説明は以上でございます。

【熊倉座長】 ありがとうございます。

本日は前回のワーキング・グループにおける討議を踏まえて，たたき台を作ってください

いましたので、これについて御議論していただいて、1つは、文化芸術政策の目指すべき姿、討議すべきところの1だったと思いますが、それから、今後5年間の基本的な方向性というを中心、具体的に御議論を頂ければと思っておりますが、まず、目指すべき姿、まとめてみたのですが、いかがでしょうか。

【佐々木委員】 机上配布の資料、オーストラリアの National Cultural Policy と、アーツカウンシルイングランドの新しい文書。これは大変参考になるし、こういう議論の場に出していただいてとてもよかったと思いますが、御承知のように、SDGs が国連の方で設定しています。それで、2030年までに17のゴールが設定されています。この2つはその前の文章なので、恐らく、それとの関連付けが弱いというか、あまり意識されていなかったと思うのですが、私、7月にユネスコの創造都市会議に出てきまして、そこで非常にはっきり出ているのは、文化政策、あるいは創造産業に当たっても、SDGs にどういう貢献をするかということがかなり意識されています。

その点から見た場合に、既にここの中に入っている言葉もあるので、少しそれをこの2つの文章の中で指摘をしておきたいと思いますが、まず、アーツカウンシルイングランドの場合で、これは文字どおり、私ども、アーツカウンシルジャパンを確立するとすれば、そこが出す文章です。オーストラリアの場合は文化省が出す文章ですから、そのターゲットが多分違っていると、よりアーツに絞り込んでいるということだと思います。

先ほど井上さんが言われた中で、5つのゴールがあるという、2ページですね。その中の3番目が、アーツとミュージアムとライブラリーが、レジリエントでエンバイロンメンタリー・サステナブルであるという言い方なんです。レジリエントというのは、文字どおり、地球規模の災害が増えてきた中で、今、共通で使われている議論です。いわば大きな外的ショックの中から立ち直る力、反発力です。たまたま日本ではそれを強靱（きょうじん）化法にしたので、アートが抜けているのですが、本当はアート・アンド・カルチャーがコミュニティや再生力に役立つと、そういう意味なんです。それから、エンバイロンメンタリー・サステナブル、これは文字どおり、SDGs なんです。だから、アーツというのは、レジリエントであり、エンバイロンメントでサステナブルであると、こういう表明というのは、意識して書いているし、これがもっと重要性が上がってくるのではないかというふうに思います。

それから、3ページにある Demonstrate England's status, まさに、文化が持っているものがイングランド全体の世界的地位を上げることで、これは国家ブランドのような話になってきますので、そういう意味です。

それから、9ページ以降で、What will we do? のところで強調されるのはやっぱりインベストメントなんです。文化への投資ということです。特にどういう分野に投資をするかがきちっと書いてあって、文化政策ですからどの分野に投資するかをはっきりしておかなくてはいけない、あるいは優先順位の問題が出てくる。

10ページ、ここもとても大事ですが、一番最後のフレーズです、particularly in places where

engagement is low というところ。要するに参画のレベルが低いところにこそ、文化政策を持たなくてはいけない。つまり、東京のように活発なところだけではないということを行っています。御存じだと思いますが、フル・エンゲージメント・ソサエティーという言葉があって、日本ではこれが一億総活躍社会に訳されたわけです。中身が少し違いますが。エンゲージメントという言葉は、最近はとてもよく使う言葉です。アーツカウンシルの方もかなりそういうことが意識されてきているということがある。

それから、オーストラリア政府で、御承知のように、オーストラリア政府が世界で一番最初にクリエイティブ・ネーションということを出したわけです。その後でイギリスがクリエイティブ・フォー・ザ・フューチャーということを出してきて、したがって、カルチュラル・ポリシーの中にクリエイティブというのが非常に強く出てきます。ですから、最初からアーツ・アンド・クリエイティビティーとか、クリエイティブ・アクティビティーとか、そういうことが対概念として出てきている。

それから、1 ページの下のパラグラフで最も大事なことが書いてあって、**the intrinsic value of arts and creative activity** ということの認識が大事だと。これは固有価値とか本来価値という意味で、文化芸術、あるいは芸術と創造活動が持っている本来的価値というものを認識した上で、同時に広がっていく、そういう書き方がちゃんとしている。

それから、2 ページもそうですが、ここは **creative industries** という言葉がかなり前面に出てきていて、まさにそこをイノベティブな問題に結び付けていくということになっているので、このあたりの押さえ方ということが大事なかなと思います。

それから、**Indigenous** という言葉がよく使われていて、これは当然、アボリジニを意識しているわけだけど、単にアボリジニだけでなく、コミュニティ・アーツのような、コミュニティに対するインクルーシブな政策ということも、広げてきているあたり、きちっと政策ワードが入っていると思いました。

その上で、今日、議論のテーマになりますが、このたたき台素案であって、4 つ挙げてあります。ここに英語を付けてくれたのはよかった。つまり、比較して考えやすい。最初は、**Creation, Deepening and Succession** です。これはまさに最もコアなところですよ。

その次が、**Cultural Innovation** ですが、僕は、これはカルチュラル・イノベーション・アンド・インベストメントとか、そういう言葉の広がりがあった方がいいと思います。その理由は、ここに書いていることはイノベーションなのです。イノベーションを起こすためにインベストメントが必要なので、「文化で稼ぐ」という日本語がぱっと来ているが、少し文化庁の文章にはしては品がないので、例えばこれは、**Cultural Innovation** であれば文化で社会を革新するという意味なんです。ですから、文化で革新するとか、もう少しこの中身にふさわしい表現をとった方がいいのではないかな。一瞬、これは経産省のクリエイティブ産業課の文章かと思ったので、それは少し違うだろうという印象があります。

それから、次のところ、**Diversity and Well-being**、これはもちろんそうですが、恐らくここにインクルージョンが入ってくるのだと思います。

それから、最後の Cultural Community ですが、これはまさにカルチュラル・アンド・クリエイティブ・コミュニティや、文字どおり、クリエイティブ・シティズ・ネットワークにつながってくるテーマなんです。プラットフォームをつくるというのは今、我々が進めている創造都市のネットワークが広がって行って、それがプラットフォームになっていき、例えばインクルージョンは可見とか、あるいはメディアアーツは北九州とか、幾つかそのプラットフォームのコアができてくると、そういうイメージになってくるのではないかと思います。そういったふうに考えていくと、これはなかなか膨らみが出てくるのではないかと。以上です。

【熊倉座長】 ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

【柴田委員】 事務局の御説明のとおり、私はおおむね、この整理の仕方でもろしいと認識しております。

ただ、その資料 1-2 の主な論点の、2018 年度から 22 年度までの 5 年間の計画とすることにつきまして、この 5 年間を考えるということは、見通しは立ちづらいとは思いますが、10 年ぐらいの計画をイメージしつつ、前半の 5 年を考えるという認識で進めた方がいいのではないかなと思っております。2025 年は団塊の世代が後期高齢者になるということで、ここで非常に大きな経済の転換点が図られるかもしれないということで、社会保障費はぐっとここで上がります。

そのために、文化芸術分野で活動する我々がどういうことをしておかなければいけないのかを含んでこの 5 年間を考えないと、2021 年、2 年ぐらいに、この 2025 年のことを考えてもう遅いのではないかとこの認識を私は持っております。10 年を考えて前期 5 年を考え、かつ 2025 年に到来するであろう人口の構造の変化とか社会保障費の増に対して、どのように文化芸術活動を進めていけばいいのかということをし少し指摘をさせていただきたいと思っております。

戦略 5 の「人をつくる」ところの専門人材の確保と教育による裾野の拡大です。アーティスト、アートマネジメント人材の育成を実施してきたからこそその確保だろうと思うのですが、確保した上で、今後も更に育成をしていかなければいけないのではないかとこの認識です。

現場で働いておまして、OJT や、Off-JT、いろいろな研修があります。キャリアアップを図っていくためには、やはり一職員から管理職に至るまで発展を遂げていかなければいけないという成長段階がありますので、その成長段階に対応した育成というのも必要なのではないかと考える次第です。

あとは、この 4 つの仕分ですが、「文化芸術の創造と発展、次世代への継承」では、劇場、美術館、博物館というものが、2020 年が終わった後、いろいろな意味で受皿になることは間違いない、地域の劇場、美術館、博物館においては、文化プログラムだけが多くの人が参加し得る事業ではございませんので、地域にとっても元気になる指標を、目指すべき姿のように書き換える必要があるのではないかと考えております。

昨年 11 月に出ました緊急提言，その中では，先端的な科学技術とアート，新領域の開発や，新産業の創出，ここは上位に位置付けられていたかと思しますので，そういう取組が必要であろうと認識しております。

それから，劇場，音楽堂について言いますと，それなりに劇場，音楽堂は頑張っております。いろいろなタイプの劇場がございまして，タイプ別にみんな頑張っているところではあるのですが，限界がございまして，指定管理者制度を強く批判するつもりは毛頭ない。うまく指定管理者制度というものを運用している劇場も多くあります。しかしながら，幾ら劇場，音楽堂が頑張ったとしても，その設置自治体である自治体が文化芸術に対して関心がありませんと，その努力は報われません。自治体の活性化，それから自治体間の横断的な取組を促進するようなもの，加えて，その上で地域コミュニティの形成が問われるのではないかと考えております。

包摂機能ですけれども，もう少し幅広く考えることはできないかということでございます。多文化共生や，共生社会の構築といったような観点からも捉えていただいて，障害者や高齢者のみならず，例えばシングルマザー，子供の貧困など，そういうものにも耐えられる，目指すべき姿であってほしいと考えます。

【熊倉座長】 ありがとうございます。

それでは順番で，松田委員をお願いします。

【松田委員】 大きな構造に関しましては，これはよいのではないかと考えております。

今回，オーストラリアの資料を提供させていただいた理由もそうですし，あと，アーツカウンシルイングランドの資料が入っている理由も同じだと思うのですが，やはり最初にビジョンを提示することの大切さが今回の案ではしっかりと認識されているような気がしました。こういったビジョンの文言というのは，非常に抽象的なものが多いと思いますが，それを分かりつつも，やはり大きなビジョン，すなわち見通しを最初に示し，次に中期的な方向を示し，その下で政策を示すべきだと思います。今回は，とりわけ最初のビジョンとその中期的な方向性をはっきり固めるということが明確になっていますので，大きな枠組みとして私は賛成しております。

少し気になったことがありますので，質問させていただきます。今回，文化芸術基本法ができたときに新たに加わったキーワードだと私が思ったのは，「世界」という言葉です。「文化芸術振興基本法の一部を改正する法律概要」の資料で言いますと，中央部あたりの「我が国及び『世界に』において文化芸術活動が活発に行われる環境を醸成」という部分に出てきます。この「世界」というキーワードを受けて，基本計画のビジョンの 4 つの中のどこかに「世界」あるいは「国際」という言葉が入ってくるのかと思っていたのですが，今回の案ではそうした言葉が入っていません。その理由をお伺いしたいです。

今回の案を最初に見たとき，4 つのビジョンの中に，「国際」とか「世界」が入っていないことを少し残念に感じました。ただ一方で，こんな時代ですから，あえて世界，世界と言わなくても必然的に日本は世界とつながっているのだと，そのような見方もできます。

少しその部分は御説明を井上戦略官の方からお聞きできればと思っております。

その質問の答えをお聞きする前に、この中期戦略というか、5年間の目指すべき姿の中で、**Cultural Innovation** のところ。佐々木先生もおっしゃっていましたように、ここは非常に重要だと思えますし、インベストメントを入れるということにも賛成しております。ただ、英語で、**Cultural Innovation** というと、文化自体のイノベーションを指すような気がします。文化を通して社会イノベーションという意味合いを出すためには、イノベーション・スルー・カルチャーとかにしてもいいのかと、そんなことを感じました。しかしこれは英語の問題ですので、それほど重要なポイントではないかもしれません。

それともう一つは、これの2ポツのところ、ネットを活用して様々なコンテンツが発信されると出ています。これも賛成なのですが、ネット以外にも様々なテクノロジーが進んでいますので、ネットとは限定せず、IT技術とかそういうふうにしていいのかなと思いました。以上が、細かなところで気付いたところです。

ということで、是非お伺いしたかったのは、最初の質問の「世界」に関してでありますので、よろしくお願いいたします。

【井上文部科学戦略官】 基本法の方でございますが、松田委員おっしゃるように、基本法、この硬いファイルのリーフレットのちょうど切れ目ですが、第2条第4項で、文化芸術に関する施策の推進に当たっては、我が国及び世界において文化芸術活動が活発に行われるような環境を醸成すること。これは、前は、国をまず発展させようと、それで世界とつながっていこうと言ったのですが、議員連盟の話合いの中で、もう国でやっていることは世界とつながっていると、世界でやっていることは国でつながっている、そういう次元をわざわざ国内、国外に分ける必要はないということで、このようにしました。

そういう中で、これを作る過程になって、おっしゃるように国際というのを1つ立てようという話もあったのですが、一方で、文化芸術の創造と発展、次世代への継承という中に、既に革新的な、当然その中に、芸術家の中には、一流のアーティストだったら当然のごとく世界で飛び立っているわけでございます。それで、世界の一流の人たちも当然のごとく今、日本にいらっしゃって、劇場で公演をし、創造活動をしているわけでございますし、イノベーションの中にも当然ながら、国内で生むだけではなく、イノベーションを生むとなったら当然、多様性を増していかなきゃいけないので、世界も意識してということもありまして、この中にそれぞれ国際が入っておりますし、その後、地域のコミュニティという中にも国際的に世界とつながっているという部分はあるものですから、国際というのをあえて立てるとするのは、少し今のビジョンとしてはおかしいのかなと思ひましてやめたところであります。

ただ、戦略としては、やはり国際性をもっと深化させるというのはそれはそれで必要であるということもございまして、創造・発展・継承、イノベーションとは別に、文化で世界とつながるといふ、文化芸術による国際性の深化というのを1つ立てているような形にして素案を作り、この辺の立て方については、委員の先生方でもっと御議論を頂ければと

思います。

【松田委員】 今の説明は明確でした。既に申し上げましたように、最初は、「国際」や「世界」という言葉が入らずに残念だと思ったのですが、イングランドとオーストラリアの例でも「国際」や「世界」という言葉はそれほど使われていませんので、もはやそれは言わずもがなのかもしれません。

あと最後に 1 点だけ申しますと、私も、「文化で稼ぐ」という表現はやめた方がいいのではと思っています。いろいろプレッシャーがあるかもしれませんが、この言葉を使うことによって生まれる予期せぬ影響を考えるとあまりよろしくない表現だと思いますので、それは言うとおこうと思いました。

以上です。

【熊倉座長】 ありがとうございます。

三好委員、いかがでしょうか。

【三好委員】 具体的に 2 つほど質問なり意見を申し上げたいのですが、1 点目は今、松田先生がおっしゃった国際のところでした、井上戦略官の御説明で、ビジョンにあえて 1 項目を立てないということはそれはそれで別にかまわないと思うのです。ただ、その次の基本的な方向性、戦略と書いてあるところで、戦略 3 に少しそれに関連する部分があるのですが、ここでいう国際性は、基本法の話をもう少し踏まえると、日本から発信することの国際性だけではなくて、外国人から見たときに、日本が芸術文化創造活動が活発に行えるところである、つまりアーティストが日本に来たいと思うことこれも一つの大きな国際性なんだと思う、というか、むしろそこをもっとこれから重視していくべきではないかと思えます。

そういう意味でいうと、今の戦略 3 が、単に発信とか、日本人が海外のコンクールで入賞するとか、これは古い方針なんです。海外と自由に行き来できる、むしろ、海外の人たちが日本に来て、いろいろな創造活動をしたい、あるいはクリエイティブ産業に携わりたいと思って、人がどんどん来てくれることの方が、これからにとっては重要ではないかと思えますので、ビジョンそのものは先ほどのことで理解しますが、少なくとも戦略のところは、そういう意味ではかなりまだ足りないのではないかと。

むしろ、戦略 3 がそのまま左につながるよりも、もっと全体として、戦略 3 がもっと大きな柱として全体のビジョンを支えるぐらいの形の方がいいのではないかと、先ほどの御説明との関連でいうと、もっと国際性ということを中心に押し出した戦略の立て方というのはあっていいのではないかとというのが 1 点目です。

それから、2 点目は、これも先ほど柴田先生からもお話がありましたが、戦略 5 の「人をつくる」、これも非常に重要なことで、具体的な指標候補のところ、文化施設における人材の配置状況というのが指標だというのも、これもちょっと狭過ぎるのではないかと。むしろ、我々が言っているのは、文化政策そのものに関わる専門的人材を配置すべきだと言ってきているので、施設に必要なのは当然のことですが、もっと広い意味での、政策に関

われる人材がしかるべきところで働ける、そういうポストをきちっと配置していくところが重要だと思うので、この辺も、もっと踏み込んだ方がいいのではないかと思います。ここはまだ候補なので、その戦略の考え方として、もう少し人材の活用、人材が必要であることをもっと前面に押し出していくことが必要ではないかと思いました。その2点です。

【熊倉座長】 ありがとうございます。

また、個別の戦略の文言や、指標は少し後半にと思っていたのですが、また思い付いたところがあれば。取りあえずこのあたり、ここも少し、これでいいのかという問題は多分にあると思うのですが。山出委員、いかがでしょうか。もちろん個別のところでも特に気になるところがあれば。

【山出委員】 4つカテゴリーがあるのはビジョンとして、いいと思うのですが、少し根本的な問題、問題というか、これはどうしても僕はそういう観点から考えがちなので、必要ないと言われれば必要ないのですが、これ、オーストラリアは大変分かりやすいと思うのは、我が国の文化政策というものは、要するにオーストラリアという国をいかに革新的に前進させていく力になるかという話だと思います。つまり、文化の中に何か入ってくるということではなく、ここから押し上げていく、スタートさせるというか、その観点がとても重要だと感じます。まずそこがもっと強くあった方がいいのではないかなと思います。

そういう観点からいくと、さっきの例えば **Cultural Innovation** が、僕もやっぱり違和感があって、言葉としてはきれいですが、僕ら、現場で、特に地域やおじさんたちを相手にしていると思うのは、我々の、例えば展示なり展覧会なり公演にこの人たちが来ればいいとを考えているわけではなく、文化に携わったり、アーティストの言葉によって、彼らの生活が、人生が生き生きと輝くかどうかが大切なのです。これは別に数の話だけでなく、深さの話でもあるので、どうやって指標、指数を考えるかは難しいと思いますが、つまり何が言いたいかというと、出口は文化にないのではないかということなのです。なので、そのぐらいやっぱり強くいけるといいというか、ジャンル間の横断はもちろん重要ですが、もっと大きなものではないか。佐々木先生が都市というお話をしますが、都市には別に文化も経済も多分なくて、全部つながっているわけです。なので、やはり裾野、国を前進させていくために文化がいかにパワーを発揮しなければならないのかを強く書いていただきたいところがまず、前提としてあります。

その中で、例えば「文化芸術によりイノベーションを生む、活力ある社会の形成」とビジョンが言っていて、それを行っていくときに「文化芸術によるイノベーション」というのは、これはつまり、何かコンテンツ産業みたいな話です。主な指標候補がインバウンドの数という話だと思うのですが、そういうことで考えれば、いかにイノベーションにつながった活力を、このアート、文化が生み出したのかはすごく重要だと思います。つまり、特に指標候補に関しては、これはクリエイティブとかという言葉も出てくるわけなので、いかにクリエイティビティが試されていると思います。なので、今ある価値の中に当てはまっていくのではなく、文化って価値を作っていくことだと僕は信じているので、そうい

う観点からここを考えた方がいいのではと根本的に思います。

あとは、「人をつくる」戦略 5 に関してですが、これは結局文化施設であるか、文化の現場に必要な人材、これはもちろんうちも求人もずっとやっていますし、必要なのですが、しかし、それは別に単なる入り口であって、必要なのは、その人材が社会をいかに豊かにしていくのかという観点なのだと思います。なので、その文化に関わる方々が、施設運営、ひいてはそれは社会を豊かにするというのですが、もうちょっと広い視野につながっていけるようになると、例えばそれは NPO や、もっと個人でやっている人たち、若しくはアートや音楽と言っていないなくても極めてこちらの観点到に近い方々とか、もう少しこのネットワークは広がるような気がします。

あと、最後に、芸術祭の開催みたいなことがぼつぼつ出てきて、これは大変有り難いです。有り難いですが、先ほど三好さんがおっしゃったように、海外のコンクールに参加したい、これは大変いいことだと思います。実際に、例えば今回、ドイツでやるけど、ドクメンタって日本人は一人も選ばれていないのではないかな。つまり、それは世界のマーケットに入っていないということになってしまう。じゃ、日本の中でマーケットを作るか。これはなかなか簡単ではないので、これはこれで頑張らないといけないのですが、ただ、世界の価値の中に日本を位置付ける必要もまたないかもしれない。新しい価値をこの日本に作っていけばいいかもしれないので、日本じゃないとこの表現はできないんだという人たち、アーティストが世界中から集まってくる国に進めていただきたい。その一つの、これが第一歩となるような、何かそこに向かっていくことになればとても夢がある、少し抽象的ですが、そう感じました。

以上です。

【熊倉座長】 ありがとうございます。

湯浅委員、お願いします。

【湯浅委員】 大分カバーされていると思いますが、ここの図でいったところの大きなビジョンが 4 つあって、戦略がある、このストラクチャーはとても分かりやすくいいと思うのですが、何人かが「文化で稼ぐ」がひっかかるというところはあったと思います。その下に「文化芸術によるイノベーション」とあって、個人的にはこの 2 つ、言葉を作る必要があるのかとすごく思います。

もし、今後、説明をしていくときに、こっちの短い「文化で稼ぐ」というのが出てしまうと、この下の、本当はイノベーションというところで言おうとしているところが、イノベーションを起こすことによって実現されるものが、稼ぐことにしかつながらなくなってしまって、多分、山出さんがおっしゃったように、もっと幅広い可能性がいっぱいあるというところがとても狭まってしまうと思うので、例えば「文化をつくる」と、ここでキャッチーな、短くするのももちろん大事だとは思いますが、より具体的に、皆さん、全ての方がイメージが共有できるような形で創造・発展・継承とかにしておいた方が、より戦略がぶれないで、又は違った方向に皆さんが解釈しないでもいいと思いますので、あえてこ

ういった言葉が必要なのか、必要であれば本当に考えないといけないかなと思いました。

もう一つ、その次のページに、ビジョンの細かいイメージがありますが、今、山出さんがおっしゃったように、幅広い社会との関係が多分見えてこないというのが、ここの文章、少しやること、みたいな感じになってしまって、例えば ICT を使ったのか、ネットを使って発信されるというのは、その結果どうなっているというところを書いた方が、その社会がどういうふうになるかとイメージができると思うので、ここの作文といたしますか、文言をもう少し見ていった方がいいのではないかと思います。

その戦略 5 と 6 のところなのですが、「人をつくる」、専門人材の確保と教育による裾野の拡大が何を意味するのかは、ここの後ろの、5 にいっぱい書いてあるところで拾うのだと思いますが、今、この 4 のビジョンを推進するために、6 つのステップが、重点的な施策というか戦略があって、ここで抜けていると思うのが、さっき、おじさんたちが輝くということもありましたが、人が豊かになるとか、今、参加や多様性はあるのですが、文化芸術によって人々が、この Well-being 的な要素が少し抜けているような気がします。「人をつくる」のところは、専門人材の確保を文化芸術セクターで、NPO も含めて働く人をつくっていく。それはつまり、その下の 6 番の、こういったことを支えていく、例えば地域のプラットフォームや、財源の確保と重なってくるのだと思います。

さっき、アーツカウンシルイングランドのレジリエンスのところのコメントが先生からありましたけれども、もちろん環境的なサステナビリティというのもあるのですが、これの一番意図しているのは、これは 2010 年に作られたので、リーマンショックがあった前からの、本当に経済的に厳しいところでこれが出てきています。ここは国の予算も減っており、自治体の予算も減っていった、そういう経済的にチャレンジングな状況の中で、文化芸術セクターがとてもサステナブルであると、基盤がきちんとしていて、そのためにはマルチなファウンディング・ソース、多様な財源を確保する、人材が必要など、その力強さのところを結構言っているので、頑張らなくていい 3 も訳してもらったら、もう少し出てくると思のですが。

今、ここの 5 と 6 のところが、いわゆる基盤を力強くするための専門人材とネットワークであれば、もしかしたら 1 つにしながら、ここのところできちんと専門人材の確保育成というのを入れつつ、少し抜けているのは、どうしても美術館や芸術施設や地域の中で行われる生涯教育とも重なってくる、その教育的な地域のエンゲージメントのプログラムのことが抜け落ちがちかと少し思いました、特に 5 番、戦略 5 のこのページのところ、もっと後でまた見ていくと思います。文化芸術に関する教育を充実し、芸術活動の裾野を拡大するというと、いわゆる生涯教育に関係するような、人を豊かにしていく、幸せを増幅していくような芸術の活動というものが、地域の中の活動が、文化芸術の教育とか裾野拡大だけにつながってしまいかねないと思うので、もっと文化芸術の、人に対する深い価値が出てくるような組み方がいいのではと思います。

場合によっては 5 番と 6 番を一緒にしながら、5 番で、より豊かな人々の人生をと、特

に高齢社会に向かうに当たってのアートの力というところも吸い上げられるといいです。

【熊倉座長】 ありがとうございます。

そうなんです。当初案で国際性というのがビジョンにあったのですが、やはり今どき国際発信というとても後進国みたいなイメージで、そもそも、芸術作品を作ったりするの海外に行ったりとかとはもう当たり前、海外の人が来たりも当たり前ですし、そもそも、人がこのグローバル時代に、人生の間で海外に一定期間住まない人の方が少ないとは言いませんけれども、全然珍しくない、この地球大移動時代の中での、人々のアイデンティティに文化は非常に関わってくるものなので、ちょっと戦略の方に落とし込んだ方がいい気はします。

5と6は、これは基盤整備で、一緒にするとますます政策が弱くなるので、これは別々にしておいた方がいいと思ったのですが、今、お話を聞いていると、やはり「文化で稼ぐ」は少し評判がよろしくないようで、上の「文化をつくる」に対して、今の皆さんの御意見だと、文化で社会を革新するとはっきり言った方が良い感じはしました。

ここで社会をつくると入れると、4番の方の「社会をつくる」が、これが今のお話だと、例えば文化で地域をつなぐ、あるいは人が輝く、人をつなぐとか、インクルージョンも入ってくるとなると、そっちにシフトをした方がいいかと、「人をつくる」のところを、芸術教育とかと専門人材等が第4次基本方針と一緒に無理くり、あまりたくさん、あれもこれも重点戦略を立てられないので、おかしいなというのはみんな承知の上で一緒になっていて、そこは切り離して考えた方がいい。

では、美術館のみたいなのはどっちにしますか。基本的にそんなのは戦略1だろうという気は、文化芸術そのものを豊かにして、広げていくみたいなものは1の方に、文化施設なら今どき当たり前、一定のアウトリーチ活動をしていくということは、さすがにこれ、考えていない文化施設は、やっているかどうかはともかく、ないのではないかという気がします。というわけで、とりあえずこういう構造も、何かこの基盤整備に2つあった方がいいかという気はするのですが、これはよく分かりませんが、どうなってくるのか。

これを踏まえて、この個別の戦略の四角のところの文言等、まだ、海外のように格好よくしていけないかと思うのですが、どこに何を入れるか、まだいろいろ試行錯誤する時間は十分あると思いますが、この戦略に関してはもう少しこういうのを入れた方がいいのではないかなど、この四角の文言とかでいかがでしょうか。

まず、戦略1はいかがですか。

【柴田委員】 戦略1は、文化芸術の本来的価値の根幹をなすものなので、重要ではないかと思います。

【熊倉座長】 この文言でいいですか、「世界水準の文化芸術の創造と発展を図る」。世界水準じゃないのにみたいな。別に問題はないですが、何かもうちょっと今日的な表現にした方が。

【井上文部科学戦略官】 もう少し文章化すれば、本質的価値など当然書くのだとは思

いますが、今回は対応、ここまで至りませんでした。

こういうことは必ず落とさないで書いてくれというお話があれば、是非、23日のときにはもう少し文章にしたもので、構造については大体何となく御了承を頂いたみたいで。

【熊倉座長】　そうですね。構造、4つのビジョンと6つの戦略のあたりは、物言いはともかくとして、大体御了承いただけたのかというところで、それぞれの戦略が目指すものがまだ少し、第4次基本方針から持ってきたような、当たり前なのですが、それもこの間了承されたので、これでもいいですが、何かもう少し、せつかくイギリスやオーストラリアの事例も頂いたので。

【柴田委員】　戦略2の「文化で稼ぐ」ということですが、私は現場で仕事をしている人間なので、あえて申し上げますと品がないこともやらなければいけない状況にも私は遭遇しますから、稼ぐということについてそんなに抵抗はありません。去年4月に、文化GDPの拡大、方向性の3で「文化財で稼ぐ」と出ています。「文化財」と言えば、文化財の活用だなということが明確になるのですが、この「文化」だけになってしまっているの、少し下世話な感じになっているのかも分かりません。稼ぐということと、イノベーションという何か文言の整理をすればいいのではないかと。皆さんの御意見で、稼ぐということは少し否定的な御意見が多かったので、ここは井上戦略官に考えていただくということではないのかなと思います。

【熊倉座長】　いやいや、「文化財で稼ぐ」なんて言ったら、文化財の部会で大変。保存か活用かで、強く保存の方を入れた経緯もありますから。

【井上文部科学戦略官】　一応、由来だけ申し上げますと、こちらのとじている緑の4に、6月の文化政策部会の方で、高田の方から御説明させていただいた、最近の政府の重要方針における文化関係の主な記述で、経済財政運営と改革の基本方針2017、いわゆる骨太の方針と言われるものの中の真ん中のあたりに、例えば文化芸術立国と書いてありまして、文化経済戦略というのを今後策定することになっているのですが、「『文化経済戦略』を策定し稼ぐ文化への展開を推進する」でございますとか、あと、4ページ以降に、いわゆる「未来投資戦略2017」、成長戦略というのがあるのですが、その中でも、6ページの上から5行目ぐらいのところに、KPIの下から、「文化芸術・観光・産業が一体となり新たな価値を創出する『稼ぐ文化』への展開を推進する」というのがありまして、今や、文化財で稼ぐよりは、少し広がってはいるのですが、ただ、文化審議会としてどういう用語を使うかは、審議会としての委員の皆様のお考えでございますので、また御相談をさせていただければと思います。

【三好委員】　後の5との関係なのですが、1の中で、施策で「国語の正しい理解」というのだけが突然出てくるのは何か変なので、ここ戦略1の中に教育の話、子供たちに対する教育の話が戦略1の中にはっきり出てこない、1が非常に弱くなる感じがする。だから、子供たちに対する教育の部分は戦略1であって、その教育をどうやってやるかが戦略5。だから、その中身の話と、それをやるための仕組み作りというふうに1と5を分けて、やっ

ぱり 1 の中に子供たちに対する部分というのは必要ではないかと思います。国語だけが突然出てくるので、逆に変な感じがします。

【熊倉座長】 そうですね。

1, 2 で行こうかと思うのですが, 1, 2, ほかにございますか。

2 は, 今, 四角の中が, 科学技術と融合した複合領域, 若者文化の萌芽って何か変な気がして, 若者文化も 1 でいいような気がするのですが。やはりこの四角の中は, 緊急提言の中あたりにこういう表現があったような気がして, でも, そんなこと, 特に言っていないのだけどという感じだったのですが, いろいろなほかの, 文化庁以外で, 例えば観光との連携, もうちょっとクールジャパン政策への寄与, あるいはデザイン産業への関連, あるいは農業など, そういういろいろなほかの省庁に出前してみたいな話が出ていたかと思うのですが, 社会そのものをいろいろ, 社会の革新を文化が助けるといふ, その中にももちろんこの下の施策としても, そもそもそのために文化 GDP を上げないと役に立ちませんよみたいなどころではないかということ, だから, 芸術祭の開催とかは要らないでしょうという感じはして, ここから先はまだ工事中というか, まだ地面を掘っているぐらいの感じ。

【山出委員】 さっきの 1 の子供に関することというのもあるし, そのあたりは少し弱いなというのもあるのですが, でも, これなんかは多様性の中でも極めて重要な観点だと思ふのです。

文科省にも関係するのかもしれないが, 美術教育とか音楽教育というのが, 少し大きな話になりますけど, もっとそこに改革が必要じゃないかと思つて, ゴールに向かっていくということよりも, いかにかそこから生み出していく力があるかの方が本来的にはとても重要だと思ふます。

それはすなわち, イノベーションと今, 簡単に言うが, イノベーションを何か文化でやってくださいと言って, さっところ出れば, どんどん日本ってすごいと思ふのですが, なかなかそんなことにならず, そういう観点から 2 番を考えていくと, 文化で稼ぐというよりも文化がその稼ぐ力を推進させるみたいな話なのだと思います。熊倉会長がおっしゃったように, やっぱり芸術祭の開催とかは, 観光の観点からという話だと思ふのですが, 少しその辺は書くなら書くとしても, 僕ら, やっぱりやっている側としては, あまり観光の観点では, もちろん重要ですが, 一番重要なのは, それが一つのプラットフォームとなつて, そこに新しいビジネスが生まれたり, それこそ稼ぐ力がそこで広がっていったりとか, そこで学んだ人材たちが各地域を面白くしていくように育てていくなど, イノベーションって僕らはこういうふうを考えます。どっちかというところ, これ, イノベーションではなくて, 観光の新しいコンテンツを作りましょうということは, 僕らが思うイノベーションと少し違うのではないかと思ふます。

なので, 本当にそこにつながっていけるような, さっきおっしゃったように, 領域横断的に文化だとか文化的考え方が, 例えば医療, 教育, それこそ行政であるとか, そっちにつながっていけるような仕組みにつながっていく施策が出てくると, もっと文化庁の意味

とか位置付けというのが何かすごい重要になると思います。つまり、僕横串というのをすごい考える方なので、そこにつながっていけるのではないかと思います。どっちかという今、コンテンツ、タスクってさっき言っていましたが、そこがたくさん並んでいるので、今やっていることと同じ感じがします。

【熊倉座長】 三好委員，どうぞ。

【三好委員】 今の話にも関連するのですが、さっき、ビジョンのところで佐々木先生がおっしゃったように、ここはイノベーションだけではなくインベストメントが必要。むしろそういう社会の基盤作りによって結果として稼げる。だから、まず基盤を、いわゆる社会インフラを作らないと稼ぎようがないので、まず稼ぐための基盤作りというのが、この一番重要なテーマではないかと思います。

そういう意味で、古い話で恐縮なんですけど、昨年の政策部会の第1回の際に、可児市の衛館長がお見えになって、ソーシャル・インパクトの話をして、あれは非常に良かったと思うのですが、あれ自身はまだ指標に使えるかどうかというのはあると思いますが、ああいう考え方をやはり是非この中に盛り込んでいって、そういうソーシャル・インパクトとして文化がどういうふうに機能するか、そこに踏み込んだような表現なり構成を立てた方がいいのではないかと思います。私もまだ十分理解していないところもあるので、もう少し踏み込んでいただければと思います。

【佐々木委員】 今の話との関連もあるのですが、ここはやっぱり **Cultural Innovation** という言葉を使っている論文も実はあるのですが、恐らく広い意味でのソーシャル・イノベーション・スルー・カルチャーなのでしょう。そうすると、新規産業を伸ばすというのはもちろんそうなのだけど、衰退地域や既存の衰退産業を革新する、これが例えばデザインの役割だったりするわけです。その問題まで含める方がいいし、インベストメントという言葉というのは、ここではイノベーションとインベストメントを意識して、その戦略、その結果として幾つかのものが生まれる、それを分けて書いた方がいい。

それから、先ほど一番最初に山出さんが言われた、いわゆるアーツカウンシルイングランドのキャッチコピーに当たる **Great art for everyone**。そういうようなものがこれのトップに来るのか。

【熊倉座長】 戦略1の方ですね。

【佐々木委員】 そうです。だから、フォー・エブリワンの話というのはやはり少し欲しいです。ただ、そうすると、ここ、戦略1が重過ぎるかもしれない。

【熊倉座長】 ただ、芸術教育そのものにも、これ、政策部会まで行ったら本郷先生もいらっしゃるし、何か一言入れてほしいみたいなことはおっしゃると思うのですが、芸術そのものの教育や文化施設のアウトリーチ活動みたいなことは当然のことなので、その辺までは1に入れておいて、もう少し社会包摂のインクルージョンの方は、そうやってやっていてこない人たち、あるいは芸術そのものの教育ではなくて、さっき出ていましたが、特にエンゲージメントが弱い、低いところとか、柴田委員もおっしゃいましたが、もう少し

し、貧困や、シングルマザーとわざわざ書かなくてもいいと思いますが、そういったところにむしろ言及することで、日本の政策のモデルでまねされると思うので、その1は、芸術教育とそのアウトリーチ活動ぐらいまでは、一般的な意味でのフォー・エブリワンは、これまでやってきたフォー・エブリワンは1に入れてもいいのかという気はするのですが。

1, 2は大体よろしいですか。3, 4, 今も少し出てきましたが, 3, 4, 行きますか。今, 4が出てきましたが。

さっき山出委員がおっしゃっていた, ドクメンタ。その辺は是非, 各分野の部会の方で文化庁の専門委員も交えてお話を頂きたいと思うのですが, ややプレゼンスが弱いのは事実, もう少し日本独自の表現形態の独自性みたいなことをアピールしていく必要性もあるかもしれませんが, せっかくアーティスト, 国際文化交流に入るのかもしれないけど, アーティスト・イン・レジデンスとか, 一生懸命やっぺらっぺらやっていますよね。

いかがでしょう, 3, 4, ほかに, もう少しこういうのを入れたらというのは。

【井上文部科学戦略官】 1つ, 悩んでいるのですが, 英国, イングランドで言うところのエクセレンスというか, すぐれた芸術みたいなのをもっととがらせていくという話は, 1に入るのですか。

ワールドセンターとして, そうすると, やり方としては2つあって, 新進の芸術家で活躍しそうな人に投資するという人もあれば, 今, 国内にいる人たちがもっと活性化するように世界から呼ぶというのがあったりして, 結局, 国内と国際性と一緒になって, そういうのがエクセレンスみたいなのが1なのか, あるいは3なのか, 両方, 施策は再掲するので, どうせまたがっている部分があるので, 全部またがるのですが, 主にどっちで捉えるか, やっぱ1で捉えた方がいいのか, それとも, どうしても日本だと, 世界とつながっているとすぐ何か国際とかになってしまうのですが, 国際的なものとして捉えるべきなのか。

【佐々木委員】 僕は, 戦略1でエクセレンスはいいいと思います。それで, 戦略3というのは, そういうものを含めて, 国民も含めて世界から尊敬されるということなのでしょう。それから, こういう考え方はどうかとは思いますが, 例えば国際芸術祭というのもの, これは恐らく日本から発した新しいアートの形になるのであれば, これを戦略3として, もっとそこを伸ばして行って, 世界中からここに来てアーティストが作ると, そういう場所になってしまうのもいいのかと。

【熊倉座長】 国際芸術祭じゃなくて, 地域型アートプロジェクト。

【佐々木委員】 地域アートといって蔑まれた表現もあるが, 逆にこれは世界にないという意味です。従来のいわゆるビエンナーレ, トリエンナーレという形を脱皮して, 地域アートと言われているものがむしろ国際化していく。そこに新進の, 世界から集まってくるようになってくると, ヨーロッパの方はがらがらになって, こっちに人が集まる, こんなことを言っぺらっぺらはいけないけど。

【山出委員】 今, 佐々木先生がおっしゃったとおりなのですが, やっぱり3番は, そ

れこそ国際戦略ということだと思うのですが、国際戦略というのをどう考えるかで、さっき言った話というのは、ドクメンタは日本人は今回選ばれていません。キュレーターは日本のことをよく知らないと言っていますので、アテネとか、そういうユーロを考える展覧会なので、それはいいと思うのです。それはヨーロッパの価値の中に、今、日本というものはどのように見られているか。あまり重要視されていないので、それは韓国とか中国の方が重要視されている、国際的だから。それは一つ問題。

ただ、それとは別に、価値を作るという話で、今、佐々木先生がおっしゃったことだと思うのですが、それはつまり、既存のマーケットに、美術であれば依存していくような在り方ではない、新しい価値を言っています。しかしながら、これはアーティストがどうやって生きていくかも含めてとても重要だと思います。これを全体的に考えていくときに、3番で、具体的な政策の在り方というのは、3番と、あとは戦略6とかも関係しているかもしれませんが、出てくると思います。

さっき、アーティスト・イン・レジデンスみたいな話もありましたが、そういうことも含めて、ここは組立てをちょっと慎重に、正確に作った方がいいのではないか。海外のアーティストを受け入れましょうではなく、以前、文化庁もやられたように、そこからどういう発信につながっていくか、それがその地域の独自性をどうやって生むかもあるだろうし、そして、そのアーティストがその地域にいることによって地域がどのように変わるか。それは単なる情報発信や、それによって移住が増えたということだけではなく、それはとても大きいと思うのですが、とにかく今、開発しないといけないと思います。

つまり、既存の価値の中で語っていくのではなく、日本独自の発信の仕方ということがあるし、求められている文化の在り方であると思うので、そこを重要視した方がいいのではないかと思います。

【柴田委員】 2020、よく語られます。2020のビフォー・アフター、どうするか。2020ってやはり通過点だと思うのです。本来的な目標、目的ではない。通過点としてやはり捉える必要があって、この戦略3の国際性の深化というのは、何か文化外交ではないかという感じがして、例えば東アジア文化都市などはそれに入ってくるので、もう少し広い意味での文化、交流ではなく、文化外交みたいな何かイメージがしているのです、自分の中では、戦略3。

【熊倉座長】 そういえば載っていませんね、施策には。

【佐々木委員】 そうですね。あってもいい。

【熊倉座長】 鳴り物入りだったのに。

【井上文部科学戦略官】 すみません。主な例です。

【熊倉座長】 3, 4, よろしいですか、ほかに。取りあえず今日のところはよろしいでしょうか。

また持って帰っていただいて、次回まで、お盆休みに、この海外ものと、英語で言われるとかっこいいですが。

あと、4のところは、もう少しレジリエンスみたいなことを、両方、1にも関わってくると思うのですが、地域創生とか言っているじゃないですか、特に地域の再生だとかに関わってくるみたいなこともあるのかという気はしました。あと、もちろん震災、すっかり忘れられているようですが、復興は全然、道半ばのような気がします。

【佐々木委員】 その意味では、一応、いわゆる震災復興の特別枠でしたか、あれは終わってしまった、たしか。だけど、もともとオリンピックは復興五輪だった。いつの間にかそれが消えてしまっているの、逆に、それをもう少し出すということはあってもいいかもしれません。2020って、本来復興のためにやるのではないのかということ。

【熊倉座長】 せめて文化の分野ではもう1回言っていきたいかと。

【湯浅委員】 多様性とか、インクルージョンとか、そういった文脈。ビジョンの中に今、3番目にありますが、その参加、全ての人たちが、アクセスのない方がという話も出ましたが、というところは、この4の中に包括していこうという感じですか。

【熊倉座長】 そうです。

【湯浅委員】 そうすると、ここの文言のところに少し、多様性など、そういった言葉が入った方が明確になるかもしれません。

【湯浅委員】 この地域づくりというところ、でも、本当は目指すゴールが少し違う気がします。地域を活性化してとか、地域を復興させていくなど、力強くするというところ、あらゆる人たちが参加をしていくというところをどこに吸い上げるのか。

【熊倉座長】 多分、山出さんがおっしゃっていた、芸術文化に特に興味のなかった人たちが関わることによって輝いていくみたいところは、4という気は。

【湯浅委員】 頭で、「地域をつなぐ、社会をつくる」というふうに2つあるので、その地域づくりと社会づくりが人づくりというような、人が輝くところも含めてであれば、青色のところ、それがもう少し入るといいかもしれません。

【熊倉座長】 そうですね。全然違う文言にした方がすてきかと。

少し整理が進んだ気がします、5、6はいかがですか。

先ほどもありましたが、政策の専門家の是非、確保育成もですし、アーツカウンシルイギリスのものを、非常にスキルを上げていくみたいな書き方がありましたが、柴田委員がさっきおっしゃっていた、登用して終わりじゃないだろうというところなど、そんなことはここへは書けません、例えば、財団の中でも全く専門性のない出向組と、ごく一部の文化分野の専門性を持っている人との間のモチベーションギャップなど、非常に重要な問題で、チーム一丸となってスキルを上げて、チームがみんな専門家になってくれないと不幸な事例は後を絶たない。

【柴田委員】 劇場でいえば、施設長、館長クラスが勉強不足です、はっきり申し上げて。それは民間から着任した人であろうが、行政OBであろうが同じです。今の文化政策についてほとんど勉強していない。館長クラスは、少なくとも文化政策が語れるようにならないといけません。そこが問題。その立場の方が、自治体の文化政策専門官とも交流がで

きて、つなげていけるのですが、今一番そこが弱いです。

【佐々木委員】 私は、文化政策研究所が文化庁にないのが不幸だと言っているわけです。だから、責任を持つところがないのです。文化政策を勉強してきてと言われて、自分で本を買って読めばいいという、そんなことでは駄目で、きちっとした研修をしないといけないし、少なくとも、本籍、教育関係であっても、ここへ来られたら最初はきちっとした研修を受けてもらうとかいうことがないとまずいだらうと思うので、そういうことをにおわせたいです、ここには。

【熊倉座長】 当然、ここに指標としては、掲げていたそういう政策の研究がどのぐらいできたかみたいなことは入ってくると思うので、今日は指標まではとても行きませんが。

【湯浅委員】 今、どういう専門性を持った人が必要なのかという話なのだと思うのですが、文化政策の専門家や、マネジメント、そういう芸術の専門家が要するというのは最低限ですが、これからの社会とか、あと、ここで目指している領域を横断して行って広く社会と関わるということも考えると、従来されているアートの専門人材育成に加えて、より幅広い、例えばファンドレイジング、いわゆる社会起業家に近いと思うのですが、あとは21世紀型の人材とか、いろいろなこれからのスキルセットと今、言われていると思うのですが、もう少し、文化芸術、更に加えてより社会とつながれるなど、そういったところの視点も入った方が、これから先10年を考えると、いいかと思います。

【熊倉座長】 ACEでは、多様な専門性の確保とたしか書いてあって、ファンドレイジング、マーケティング、アウトリーチもですし、それを今、ものすごく、数少ないスタッフにみんなやらせているのが現実で、例の美術館の学芸員要らない発言もありましたが、あのお気持ちは分かりますが、海外の美術館で5人体制でやっているところを日本は1人でやっているの、そこまで回らないという感じかと思います。

【山出委員】 今、湯浅さんがおっしゃったことは本当そう思います。よくどうやったらそういう人材ができるのかということも聞かれるので、多分、何もしない方がいいですよとよく言っていて、サポートがあって育っていくというのは弱いから、本来はそうじゃないのだと思います。

アーティストも多分同じで、吸収する力が強くないと駄目だと思います。以前、うちに、フランス大使館で働いていたスタッフが3年くらい働いていたことがあって、その子はフランス語と英語しか話せない。何とか英語でやりとりしながら、極めてすぐれたアナリスト的思考を持った方で、うちでもレジデンスしたら2件の枠に対して世界中から850件という応募が入ってきた。仕事がうちも忙しいので、さっきの5人が1人がみたいな話と同じように、ゆっくり日本語の勉強をするために週3日間、日本語学校に通うというのは、なかなか現場でできないので、ようやく1日だけ仕事で勉強してきなさいということはやれましたが、僕らNPOでできるのはそのくらいでした。

何か特区ではないけど、海外の方々がこっちへ来て働いて、日本の、それこそ芸術祭ではなく、新しい今までにない取組というのを持ち帰って世界に広げるとか、フルブライト

奨学金ではないが、そういう形で日本の思想、哲学というのを世界に広げていくというやり方もあると思います。さっきのマーケットに入っていくというだけではなく。そういう観点からいうと、ここの「人をつくる」ということと3番とは極めて近いと思います。

もう一つ、僕、NPOをやっている予算化も、全くどこからもされていませんから日々お金を稼がないといけないのですが、ほとんど僕はコンサルです。企業のコンサル、アート系のコンサルですが、スタッフもかなり、経済のことを考えないといけない。今の社会の、プレジデントとかも毎日みんな読んでいるみたいな感じになってくる。

でも、この人たちは美大出身もいて、美術大学のアートマネジメントを勉強した方は、なかなか、結構現場弱かったりするのです。もっと雑草みたいな子がかんがん頑張っていく。なぜならば、彼らは知識を吸収するしかないのです。知識を学校で得たものをここで披露するというのではなくて、目の前のものと向き合っていないといけない。つまり、さっきの社会起業家みたいな話もありましたが、やはり地域を豊かにしていくというのは、その地域といかに向き合う力があるかということなのです。それはとても、ある部分の領域の勉強ではなく、もっと大きな総合的な領域の勉強になる。なので、本当に人材を育てようと思ったら、いい現場をたくさん日本中で作って、その中で2年なり3年なり4年なり、しっかりその現場をずっと踏ませる。そこで力強く吸収した子たちがどんどん出てくるという、そういう競争力にした方がいいのではないかと思います。

【熊倉座長】 面白いですね。海外からのインターン受入れみたいなので、なかなか日本語ができない人に給料を払うのは厳しいけど、そういうのを受け入れてくださいってやると、きっとたくさん、この日本型の地域型アートプロジェクト、非常に日本独自の価値観を、新たな価値を創出しているのだから、海外からもすごく注目を浴びていて、留学生は多いのですが、働けるとね、1人いると海外発信力がすごく高まるので。

【三好委員】 少し難しいことを言うかもしれませんが、これは国が作る基本計画なのですが、今度の新しい法律では、国の計画を参酌して地方も計画を作らねば、努めなければならないとなっているので、もちろん地方がそれぞれ自分たちで独自のものを作るのはいいのですが、人材、専門人材のところは、国も地方も共通の問題がたくさんあると思います。

国の場合は、専門家がたくさん集まって議論していますが、地方に行くと、そもそもどういう人材が必要なのかとなります。実際にいろいろ活動される方は、それはそれで現場でいろいろ御経験をされていくのだと思いますが、例えば、さっきの文化政策の専門家といったときに、それはどういう人なのかということは、地方だとなかなかそこまで分からないケースが往々にして起こり得る、言葉だけ専門的人材と書いて終わりになってしまう可能性があるのだから、できれば、この国の計画の中に、専門的人材というのはどういう人なのか、それはどういう知識、経験なり技術が必要なのかがある程度分かるように、ここの計画でしておいていただければ、地方が計画を作るときに参考にしやすいかと思う。どこまで書けるかはいろいろあると思いますが、そのところが気になりました。

【井上文部科学戦略官】 イギリスとオーストラリアのものを、今、スキルの話がかなり出ましたが、もう一つ、イギリスの中に、ゴールの 4 番目に、リーダーシップと労働力、要は団体の、当然高いスキルを持ってほしいというのがありますが、ダイバーズというのあって、多様で、多分、人種とか、障害者の方が入ってくるなど、いろいろあるとは思いますが、男女とか、そういうものも日本で必要なかどうか、そういう要素も加味した方がいいのかどうかについても、もし御示唆があれば頂ければと思います。

4 番目に、The leadership and workforce in the arts, museums and libraries are diverse and appropriately skilled で、アプロプリエートリー・スキルドは当然だと思うのですが、ダイバーズがそこまでいっているかどうかというのがあるのですが、あくまで今後の 10 年間や、もっと先を見据えた方向性と戦略として、やはりそういうワークフォースとかリーダーシップ自体もダイバーズである必要がありますか。ですから、どうかというの、もし教えていただければと思います。

【湯浅委員】 特にこれ、作られたのは 2009 年ぐらいなのですが、今、ものすごく多様性、ダイバーシティが一番強い、かなりプライオリティーも高いので、恐らく 2010 年以降の改訂版は、また違うストラクチャーになると思うのですが、こと、ワークフォースや働く人材については、国の中にも、日本よりも多様なので、人種やいろいろな障害のある方も含めて、その社会の多様性を文化芸術のセクターの中でも反映して、そういったことを目指していこうと。特に美術館、大きな機関のトップのリーダーは白人の男性がとていまだに多くて、そこに女性を登用して、有色人種の方や障害のある人がリーダーになる組織をもっと作っていこうというための後押しをすごいしているというのが、今の背景にあるというのがイギリスの状態なので、ビジョンとして多様性をとにかく押すというのがすごく強いのだと思います。

【柴田委員】 多様性でいうと、平成 21 年度、全国公文協が調査した結果がありまして、管理者の意識や職場環境の実態を探るアンケートを実施したのです。そのときに、職員構成のバランスや、専門職人材の不在や、人件費の上昇、時間外勤務というのが問題点として上位を占めました。特に職員構成バランスについては、行財政改革とか制度改革などの影響で計画的、定期的な採用を実施できなかったのです。ですから、もう 10 年採用していない、20 年採用していないなど、そこが陥没地帯になっているのです。ですから、年齢構成がいびつな施設も多かったです。

一方で、女性管理者の占める割合が 1 割に満たない。やはりいろいろな公文協の会議に出ると、いまだに女性は私一人や、数人、全国でも館長を務めている女性は本当数人しかいないです。そうすると意見も男性中心になるわけです。やはり女性ならではの目線というのも非常に重要なので、半々とまでは言いませんが、四分六や、七三など、女性の観点を文化施設に多く取り入れるようにした方が、例えば託児サービスであるとか、独り親家庭の問題であるとか、そういうふうなものに積極的な文化芸術の施策が導入されるのではない、しかし実態としては 1 割に満たない。平成 21 年ですから少し古いですが、そうい

う状況でした。

【熊倉座長】 文化の世界は、現場ではいずり回っているのが女性で、上の方へ行けば行くほど女性がいなくなっていくというのは、残念ながら常識なのですが、美術館も女性館長、増えてはきましたが、まだまだ少ないです。学芸課長クラスでもまだまだ少ないような気がします。

【松田委員】 先ほどの湯浅委員からの意見にも重なる形になるのですが、オーストラリアもやはり多様性というのをかなり強調しているのですが、そこは先住民の問題が大きいからだと思います。イギリスもやはり民族の多様性が強いです。日本ではオーストラリアやイギリスと同じくらいに民族の多様性が問われることが少ないため、文化の多様性自体をつい忘れがちになりますが、今、柴田委員からも御指摘があったように、この文化の多様性の中には年齢構成やジェンダーの多様性も含まれます。したがって、多様性という言葉がこの戦略5の中に入れるということに賛成します。

【熊倉座長】 時間になってしまいましたので、6のところは少しと積み残しでございますが、評価、財源確保、これは、基本的にプラットフォームづくりで地域版アーツカウンシルのことなどが入ってくるかという気はするのですが、その辺のところは次回で、戦略の1, 2, 3, 4, 5, 次はもう少しすてきなふうに、お願いします。

最後に、今後の日程について、事務局より説明をお願いいたします。

【高田企画調整官】 事務局の方から、資料4に今後の日程について書いてございます。

8月23日にワーキングの第3回、文化政策部会については、その後、8月29日に行う予定でございます。また、各ワーキングを9月に行う予定です。その後、10月5日、第4回基本計画ワーキングをやる方向で動いております。その後、文化政策部会（第4回）を開く予定でございます。

新しくできるワーキングについてですが、今、基本的に各担当課の方でそれぞれ人選を進めておまして、基本的には五、六名、新しくそれぞれの分野で専門委員を選んでいただいて、プラス文化政策部会の委員に2名程度に入らせていただいで議論が連動するようにと、そういった形で動いております。まだ確定しておりませんし、また、何を議論するかによって、どの委員に、場合によって、ここに来ていらっしゃる委員にお願いするような場合もありますし、基本計画ワーキングではない、ほかの政策部会の委員にお願いすることもございますので、それは近々、お願いする委員には連絡があるかと思っておりますので、その際にはどうぞよろしくお願いいたします。

【佐々木委員】 チラシの説明をさせていただきます。

先ほど、稼ぐ文化財という話が出たが、その提唱者のアトキンソンを呼んでいます。それで、きちっと保存しようという代表で村上さんをぶつけて、行います。事例として二条城の活用と保存をやります。これが8月25日です。

その翌日、さっき出た東アジア文化都市の市長サミットをやりまして、ASEANも含めると今のところ19都市に呼び掛けして、17都市は市長ないし副市長が来るという形で広がり

を見せていまして、恐らく東アジアの東を取る段階になるといいのですが、そうするとマネジメントも大変なので、誰がやるのかと思っています。よろしくお願いします。

【熊倉座長】 本日はどうもありがとうございました。基本計画ワーキング・グループの第2回はこれにて終了したいと思います。お疲れさまでした。

— 了 —